小川為治著述

開化問答

下

小川為治著述　開化問答巻下

開次郎

さて〳〵一服やらかしましたがこれからまた御談義をはじめませうそれで今の御論によれば当時政府にて御取立なさるゝ諸運上ハ皆無理なものばかりでござり是迄通り百姓の諸年貢を取りますのハ御仁政でありといはれまするが失禮ながら夫れが第一の心得違といふものでござる何故といふに

先剣から口が酸くなるほど話す通り今天子様の御
政事を施し給ふハ皆民百姓我〻の為にしなさるさかい年
貢運上を取立なさるも矢張民百姓我〻の為じやさかい
そのわけハ甚知り易き事じやに今上に政府といふ物がある
ハ世の中を取締する者がなければ世間ハ暗闇にて押
込盗賊ハ勿論人を殺しても咎ることもなく我物と
奪ふハまだしも訴へるところがなきゆゑ外すれば金
銭を貯へるものもなければ田地田畑を所持するものも
出来ぬ實に弱き人ハ詮方なく飢死でもすること

に落入ませう若しくハ試にこれらの害を防がんと思へバ夥多の金銭を擲ち盗賊の番人やら田地の番人やら大勢召抱へておき始終心配して氣を附て居なければなりまひ然れバかゝる患ひになく萬民枕を安く家業を營まれるハ是れ上に天子様ありまして政府に諸役人が備りそれぞれ御政事を施し給ふゆゑの事なれバ實に些少の年貢運上を出しかゝる大なる恩恵を受ると思へバ世の中に此政事ほど安き物ハござりませんさて世の中の仕[illegible]ハ

何事をすれバそれぞれの入用がなくてハならぬ筈
なく天子様の諸政事をなさるゝにも諸役人の月給
より紙筆墨米の物に至るまでの入用ハ日本國中
へ割合出させるより外ハ仕法ハございませんなぜなれ
バ國中惣躰より出させるといふのハ色々の仕事
ハ日本國中の人へ關係ある仕事にてたゞかゝる大仕
事をすげなき人等が大勢寄合てなしたとしても混
雑のことが生じて纏りが付ぬゆゑ天子様御一人に御頼申
上げにて政府ハ人民の仕事を取扱ふ場所天子

様ハ請負人の頭取ておもたちされバ政府がかゝはれハま
たらの仕事を銘々各々一分づゝ引受取扱ふバかりなく
あともあらへ年貢運上を出すハ恰も己のものゝ如き仕事
を人に頼みて其入費を辨へ償ふと同様ておもむき
まさず又政府の恵を受るさて百姓町人皆同様なれバ
今までハ百姓のミ年貢を出せしハ実に理にそむけれ
るなれどもいおさきハ人のおそれゆゑ追々百姓が耕作を
きらひ職人商人に業を轉じ終に産物の出来
がすくなくなり随て職人商人の家業も衰微す

るなとて云ざまる元来田地を耕作して一ヶ年千両の収納を得る百姓が百両の年貢を出せバ商をなしても仕事をなしても千両の儲ある商人職人ハ同じく百両の年貢を出してよろしき筈てあるなれどもけハいと知れぬ中なきまとふとく百姓丁人とも同様に政府の恵をうけ同様に日本の土地に住居なし同様に日本人の権利を保ち皆同様安穏に家業を営むゆゑてあきなひハ是迄百姓のミ年貢を出せしハ実に不公平にて夫れより終に国の産物が衰微す

るやく成行にしたがひて出来るさしく出来せかり政府にて租税を
收納する有様を清話やますせう先租税には二様の區別を
立て請取上なさる事でござる一を私有税といふ是
ハ人々の家産に付て取立る運上にして田地家作の類
の運上をいひます一を物品税といふ是ハ絹茶蠶卵
紙の類などの産物より收る運上をいふ物品税ハ人
間必用の品物からハとらざる規則にて其の外の玩
物の類奢侈に屬する物からハ重き運上を取ると
てござる譬へバ五穀紙油の類からハ運上をとらん

しこ、金銀の細工菓子酒煙草の類芝居寄場が
し坐敷娼妓藝妓抔からハ重き運上をとる事として成さる
何故なれバ此の物からかく重き運上を取立るといふにま
づ此れ物ハ畢竟人の情を慰るまでの用なりしたと
へなまじ此れ物がなきとて人間の生活にさまたげが
あるわけもなくよく〳〵勘考して見ると無益に属
する物でおかずなる事じゃ今日の場合なるたけ此等の物
を廃止るつもりにハ此の如ゆゑ只是等の物より重き
運上を取立國用を助るなれバおぎなる殊に貸座敷渡

世娼妓藝妓の属ハ遊民とて子き世間乃為ニ何乃益も
なきぶるもだめしくひてぶぎるされど無理ニその家業
を禁止さハ當人乃自由を妨るわけニ落入政府ニて
も濟ぬことゆゑたゞ殊更重き運上を取立自然正經
乃家業を營むゆゑ志くものにてぶざることゝ前にも清
話し通り日本中の人が政府乃為ニ年貢運上を納
るハ詰り已乃仕事を天子様へ信頼ミておき其の
入用を辨へることなれハ銘々家産乃大小ニ従ひ公
平ニ割合出銀するハ當然乃理合てござる且天子様

性理大全
月落烏
姑蘇
江

應需
惺々暁斎

ハお足を御取立なさるゝとも御自分様の栄耀栄花に御用ひなさるわけハ更になく御自分さまハ宮内省といふ御役所の御賄ひにて一年總六十萬両位の御くらしておいでなさる ナント勿躰なきほどの御倹約でハござりませんか其の餘ハ悉く政府の入用にして譬へバ大蔵省にてハ農業を勧め産物を殖やし通用金を製造し世間の融通をよくし年貢運上を取立國用を足す等の入用があり文部省にてハ世の人の学問を勧め智識を明かにさせ人々の幸福を増させんと世話する

入用がござるその他諸役所ともにこゝにそれ〴〵の受持がありてその仕事を行ふ費用ハ皆銘々より納めさる年貢運上にて辨じるとしてござるされバ足下の彼是涛論……なさけない理窟ハこゝに僻論なく正真の道理を云んにさらぬゆゑかと思ひ升

㊄舊平　段々との説ありくだきよく呑込ましたダカ僕ハまだ口を噤で嗜るあけにハゆきませんそれハなんだといふに交易のことにてござる僕の考へにハ天子様が法直に

御政事をおさめる事になつたといふを是迄ハ公方様乃御可
愛がりなさツた西洋人等ハ直に御掃攘になるだろう
と思ふて楽んで居升しに矢張以前の公方様と同じ
事にておまけに御一新以来ハ交易場乃数も殖え當
時でハ丁度五ケ所でござるナニト御考へハ更に合点乃
行ぬ夫してハござりませんかある方乃御話に元来ま
の日本といふ國ハ神國でござるから日本人乃智恵と
いふものハ中々西洋人等乃およびもないもので物事
何も角も十分に備て何一つ不足乃ない世界随一乃國

そろうてござる　そもそも慾の深い西洋人等は己が悪國
て物事不足だらけな物ばかり世界中の國々が唯
一ツの日本國を目掛て来て彼奴等の國の何の益
にも立ぬは品物を持渡り日本の結構なる品々を
買出し追々日本の諸品を買盡し結局には日本國
を乗取ふとの不届千萬な企をするものでござる
それゆゑに近来諸色が拂底なく物の直段はことに元
の二増倍三増倍にもなりて誰も彼もこまる難渋し
て居り升しなきこゝな　彼奴等の仕業でござるござる　不

じ悪い西洋人等をなんで天子様ハ大事になさつて
彼奴等のいふ通りになさるならトントわけがわから
ぬなどゝいふ所の舊平抔ハ薬罐頭が沸騰るやうに
思ハ升ル

開次郎
舊平君足下までが正真の道理をしらぬゆゑか
かゝる疑の生じるなどゝいふ人にはわからぬ僻論を強
く言立をなさるゝと諺にいふ闇黒の恥を白日へ出す
やうなものにて詰り足下の頑固がわかり却て人

に笑ハせるゝとかし思ひの外何故足下乃言葉か僻
論だといふにもと天子様が外國の交易を御許なき
つたるゆゑ柄にハ畢竟天道様乃御趣意にお志
たがひなさる事とておぎなるのわけハ先人間といふ
ものハ一人でハとても世を渉られぬ筈のものなく
その證據ハ一人乃身にハ衣服も入用なれバ食類も
入用なりまた住居も入用でござるまゝ其上の品物を
得るとしても一人して悉く製造るわけにハゆかぬゆゑ
是自分ハ自分乃一ツ乃家業を營て自分乃製造と

餘所の品物を以て己の欲しく思ふ品物と取替へ
用を足すわざにて、さるその取替へるに就ては近所鄰
家又は五十里百里さきざきの人とも取替へねばならぬわざと
なりまして、人間交易の源は天道様の思召でござる
まづ人間には父母兄弟といふものがありまして、それから親
類といふものがあまた出来まして、段々繁殖して遂に一
郷一國をなしたわけでござる。今でも田舎には一村悉く
親類ぐるみにて場所がいくらもあるほどにて、さうかとて
まづ世界の出来はじめといふは天御中主神といふ

神様がありそれから高産霊神神産霊神といふ
二人の神様がましましてこの神様の徳によつて此
地球も出来人間といふものも出来たるよしなりさすれ
バ源に溯りて見れバ西洋人だとても元我々と一つ種の
親族でありしが世を経るに従ひ名もかはる國の人
にわかれるまでのことでござるそれゆゑ人間の親兄
弟親類に交際も近所隣家の人に交際も五十里
百里さきの人に交際も西洋人に交際も道理ハ同じ
ことなく是又全く天道様の御思召でござるまこと

是迄日本ハ日本だけで何一ツ不自由なく居るのゝ外
國と交易がはじまつて諸色高直になり下々か難渋
するといふハ分かりません何故といふに人間ハ一日も交
易せねバ居られぬことのなし交易とハ自分の餘分な
る品物を以て自分の乏しく思ふ品物と取替へるこ
とでござるさまでぞ世のひらけはじめの交易ハ
いはゆる物と物との取替へにて譬へハ穀屋の米八ハ
己の餘分なる米を以て紙やの半四郎の紙と取替へ
織物屋の棉助ハ己の餘分なる織物を以て金物屋の

鉄蔵乃刄物鍋釜と取替へるかくをしめハ物と物
との取替へをしくして居た所が段々と不都合乃こと
のゝ多きゆゑ又一寸乃知恵を生じ通用金といふも
のを製造たるだけにてすぎる通用金があれバ我餘
分の品物など通用金に取替へおき何時にても不
しき品物を入用だけ求ることが出来るゆゑ以前と
ハ百倍乃便利を増しなりてすぎるゆゑ通用金が
出来てくるゆゑ売買交易抔といふ名目も出来人と
売買交易といふ事乃大本をあらはさしとにあった

けれども矢張以前の物と物との取替へに聊か違ひござり
ませんさうじやが人々が日々に入用なる品物を売買す
るは矢張其の交易にて今では交易とさへいへば西洋
人と売買する事の様にのみ思ふは大いなる誤りでござ
る又西洋人と交易をせねばならぬといふは試に考
へてごらんなさい今ここに何か子細があつて人々日用
品の売買の出来ぬやうな事件がおこつたらば各々の
難渋は勿論終には其の世に人種が尽るやうに成行ませう
ナント此等の理合をよく知人なれば交易は天道

様乃御趣意にて人間乃大利益をする物だといふ事
はよくわかりませうさせば日本同士交易するも西洋人
と交易するのも只大きいと小さいの相違のみにて理
合は同じ事にて天道様乃御趣意に従ひ人間の幸
福を増さんため乃仕業でござるそれに頑固なる人は
やせ日本は日本だけでなにも不自由なし抔まをを先
外に皆理をしらぬ奴言葉でござる既に不自由であった
驗は天保年中乃饑饉を御考へなさりませ外なの時は
道傍に行倒て居る者が山乃やうにあったと口外さる

に慶應年中の不作にハ外國米の御蔭を以て一
人も餓死するものハござりませんナントそれでも不
一人不自由ないとまをさせませうかそれ皆天道様の
法趣意を守ると守らぬとによることでござります今是
に由て考へて見れバ天保年中の饑饉ハ丁度一人
者が常時親類や近鄰と交際ずに居て病に罹
りたる時誰一人看病するものもなく終に死に臨た
ると同様にて誠に悲しいものでハござらぬ人ハ且人間
といふものハ段々開けて来るに從て物事の全備

あるのを好む天性がある者ゆゑ唯一通り入用な物
ばかりでハ用が足りませんそれを一通りの物ばかりです
むといふハ未開な國のことでござる今日入用な
物ばかりかぞへれバ米味噌醤油薪炭油の類茶碗の
數品でござるされバ衣類抔も木綿でこしらへたのが
一二枚家居も竹の椽に茅の屋根などで用の足りること
いふまけれど然し人のその通りに行ハなくて己が勉強
によりて自然饒福になれバ衣類も木綿よりハ紬つむぎ
よりハ縮緬と段々美物を着用し家居も木作りよき

土蔵土瓷より石作りと殿〻美室に居ることを好む
ハ大よ天然にして人間の天性てまざる癖へバ煙草と
いふものハ昔し慶長の頃外国からはじめて種がて
たり九州邊にて作りそめたるものにてその後火災の
恐があるといふとて徳川三代の公方様の頃にハ度〻作
ることを禁止たりしけどつひに廃止ることが出来ず
今てハ日用の一品にて煙草烟草入喜世留の数を
賣買して渡世する者数へ盡されざる人ほどでハなかるべく
がその外女の櫛笄などの属ハ實に奢をきハめて

とめて是皆世乃開けと申しておざるさうせバ船来乃薬種砂糖鉄類羅紗西洋木綿時斗石鹸の類もまた今日乃日用物にて今急に交易を法禁止にあらバ田舎ハもちろん東京抔にてハ忽差支へるものが沢山あるゆゑでおざるさうせバ政府にて外國交易を許開きなさッたる八畢竟銘々乃為に互に乏しき物を取替へ物事を全備して人間乃歓楽を増させんための事にて五ヶ所乃交易場でハまだ不足に思ておざるさかい徳川家ではじめて外國と交易を

御開きになりたる頃ハ諸色が急に高直になり世の人がいろ〳〵難渋を唱へましたがその頃においてハ物事に段々折合がつき諸色も追々下落し誰一人難渋をいふ者ハないやうになり外々より諸品の賣方がよき所から元方の人々が皆精を出し追々品物の仕出しが沢山になつて来たゆゑますます其の末々も銘々精を出しいろ〳〵の品物を製造へ外國と交易すれバ一人の富ばかりでハなく日本國中の富になり遂に日本ハ世界一番の富國になるだらうとおもはく

考へ升ハありがたきことでござる

⑥舊平

足下の御理解にて外國と交易の理合もわかり僕の是迄の疑ひハ大抵とけ升したれどもまだ〳〵措默に引込だけではゆきませんそれでハ此の幕政府にても所々へ學校を御取建なされ下々へ學問をするやう御世話なさる學問をする事ハよい事だとハ聞て居り升るが當時御上から御勧めなさる學問ハみんな横文字ばかり一寸見てハ蚯蚓がのたくつて居るやうな文字

ぢかり是迄乃學問ハ皆陳腐しかく四書五経抔ハ
ふとのハ手ふとるとのもむきしとのみとさうしく見ると
日本乃是迄乃書籍といふ物ハ益ふ立ぬ物でござる
かならず益ふ立ぬ物ならバ今迄人々が珍重する筈も
なし儒者や學者を尊敬するわけもござりまひ
さ匙ハちいらハ政府で西洋ずき乃よみろかゝふちんでも
彼奴等乃物ならバなふんでもよきましだと思ひ大ふ妖惑
ござるみるとみろてハおぎらんか

開次郎

成程此等乃疑ひ一應ハ尤も乃やうに聞ゆれど是に
ハ深き理合乃あることでござる先文字といふものハ人
の意を達し世乃中乃理合を知るための道具なれバ
すべて言葉乃かはりをなさしむ物でござるそれを漢土乃文
字といふ物ハその数三萬六千もあるよしなれバその文
字を用ゐて用を足さんと思ふ者ハ文字を知る為に
二年三年乃日数を費やさねバならぬことでござる又
日本乃いろはハ四十七文字西洋乃横文字ハ二十六
文字なれバ日本や西洋の字を知るハ一月もかゝれバ

出来ますけれど其の得失を考へるのハむづかしき文字乃為ニ余斗なる光陰を費やすハ真ニ無益なることでござるなど文字といふ物ハ前ニも御話の通り世の中乃理を知る為乃道具なれバ恰も大工や左官乃鑿鉋泥鏝抔と同様なる物でござる今大工や左官が道具ばかり沢山所持して居てもとても家を作るとか壁を塗るとかをしらなけれバ用ニ立ませぬ学問もそれも同じことでいか程むづかしき文字を沢山知つても理合をしらねバ用ニ立ませんそれ故ニ道具だけの穿

鑿に二年三年費やすハ馬鹿乃上なし痴獸の親玉
とも申ませう是漢文字乃不便なところでござる又
學問と云ハ唯むづかしき文字を知り解しむづかしき古文
をよみ和歌を詠し詩を作るなど世上に實乃なき
文學なりとてハござりませぬ是等乃文學も隨
分人乃為になることもあれども古来世間乃儒者和
學者などの申程さまでにあがめ尊むべきものでハご
ざらぬ昔しより漢學者に世帯持乃上手なるも
の少く和歌をよくして商賣に巧者なる町人

も稀てござるなきゆゑ心ある百姓丁人ハその子乃學問不出精するを見てとやかく身代を持崩すなどゝ親心ふ心配するものもありて無理ならぬわけでござるなれどその學問の實ふ遠く日用の間ふ合ぬ證據でござる今かゝる實なき學問ハさしおき專ら勉むべきハ人間普通日用乃學問でござる譬へバいろは四十七文字を習ひ手紙乃文言帳合乃仕方算盤乃稽古天秤乃取扱等を心得るふ又ならんで學むべき箇條ハまだそのほか多くござる地理學とハ日本國中ハ

勿論世界萬國の風土道案内究理學とハ天地萬物の性質を見分ちその働を知る學問歴史とハ年代記のくハしき物にて萬國古今の有様を詮索する書物經濟學とハ一身一家の世帯より一國天下の世帯の持やうを説けるもの脩身學とハ身の行ひを脩め人に交りこの世を渉る為の天然の道理を述たるものなり是等の學問ハ人の貴賤にかゝハらず一般に知らで叶ハぬものだからハすでに學問の中へとりて記載してあるぞ何故ならバ其等の事を知らでかなハぬと云ふに譬へバ寒氣の強き時ハ寒さを防がんが為障子を閉

竈で火を盛におこし大勢群って居れバ皆かならず逆上して鼻血を出すやうなことがござるなり空気が流通せねバ炭素といふ物が外へ出ぬゆゑなり究理学を志す人ハよくよく此理を悟るべしとてござる又人といふものが前日の儲を貯へずして今日の生活をする者ものあるハ無益なことに一銭も用ひず今日の備を溜ておいてまさか後日の患に備へなければならぬことでござるの理合を知るハ経済学なり経済学を志す人ハ他人の異見を受るに及ばん自然自分から質素倹約をすること

てあづかることなぜらハ皆學問乃力てハあづかりませんぞ
其の外百姓なぞハ耕作乃爲是迄乃仕きたりかく改正
した方が取上高も殖え手數もかゝらぬと此等の事を
考へるにハ植物學地質學化學抔入用なり職人なぞハ
此車ハ在来の造り方ゟもかく改正した方が手軽く
しかく便利なるとかゝる事を考へるにハ器械學入用
なり商人なぞハその品物ハ何國乃出来つゞく製法、なぞ
元手ハ何程位かゝり世間へ一ヶ年乃賣し高ハ何程位
と此等のことゝを考へるにハ地理學物産學抔入用なり

すべてかやうな等の學問ハ今迄日本人の氣が附ぬこと
なれど皆西洋人の考へ出したる事なれバ此等の學問を
するに何れも西洋の翻譯書を取調べ大抵の事ハ日
本の假名にて用を便じ或ハ年少にして文才あるも
のハ横文字をも讀ませ一科一學も實事を押へての
事に就きその物に從ひ近く物事の道理を知りたる今
日の用を達しさせるやうするが肝要ておざなる者ハ人間
普通の實學にして人たるものハ皆悉くたしなむべき
心得てなかなかの心得あり後に四民ともに人の危急に

なれバ家業を營ミ次第ニ繁昌なしつひニ獨立不羈の
人間となるなれバなかなかまして漢土の學問が隨分よき
ものなりとも人の爲になる氣遣ハなきものなれど究竟
理合ハその程のことにあらずして只文字のむづかしく
骨折ると利益とを較ぶれバ到底利益ハすくなきものにて
あらざる今でハ強ち御上よりも漢學を御廢しなさつたと
いふ事ハござりませんが只西洋の學問をしらべる方が日用の
益になり身の爲になるものゆゑ專らそれへ御導きな
さるこればかりか古來より學問の道ハ情を啓いて

外から力があつて根氣のよき人ハその人の了簡次第和漢洋ともひろく學ぶがよろしい事でござる唯普通の人の學問ハ理合を知るを専一として假名抔なく用を足す方が便利ゆゑ法上でもその法趣意を以て所々へ學校を取設讀め書き文字なく人間日用の爲になる學問を教へ人才を陶育なさるゝなしてござる其外つまを西洋人に妖惑されて居るを猿といふてなさるハ畢竟學問の理合を知んなさらぬ足下の頑愚とやとので ござる

（七）舊平

妙に足下の淸講釋まで西洋の學問を學ぶとけハき
つぽりとうちかりましたしかしそれに就てハもう一議論
せねバならぬことがおざる其ハ大の頃世間の風俗を見
るに今ま是迄の家作を西洋風に作りかへ頭ハ散髪
あるく身體にハ筒袖細袴を纏ひ食物ハ牛の油煎が
よいの家の煮附にしよふのとふざけ居る非ナント是
てハまるで西洋人に隨從るしまつとうちゆうならし眞
に歎かハしいおしてハおぞうらんか是迄四足を食ふこ

は神様の罰があたる穢らはしい物だと日本の人は誰も
食ふ者はござらぬたまたま藥食に猪など食へば三日
の間は神様へ手を合せる事も出来ぬ程のきびしく
ところでござり神國の貴いところがあらしくいふものでご
ざるそれを此節では牛鍋だとか豕鍋だとか牛の
乳がよいのなんどかのといひちらしその口を漱ぎも
せず神棚へ向ひて拝禮をとげるいか程拝禮をする
したとてなんで神様が承知なされませう罰の當
らぬはそのくへの幸でござる又家作りも是迄日本は日

木だけにいろいろと調法な作り方もあり立派な作り
方もかざりそ生をやし煉化石どの石作りだのよろしく
無益に高い金銭を費やし何の利益がありませう唯
其家に住居しまして鬚でも生やしやうに西洋人を真似
るよ宜を不か功能はかざり計りまひ又衣服もまだ冬は
綿入夏は単物と日本人は日本服で沢山用が足りて居
り外そ生を世の生物識の半生熟な奴等は今急
に氣の附くゆへ窄袖細袴を着用なし蝙蝠傘を手
に持驕慢な面付をして偶恒體の衣服を着て居る

くに逢へハ開けぬしらぬ野蛮だらうがいひだの人等の仲間からハ人間でないやうに申して居り升殊に異風のハ散髪でござるものなどハ人の女房でも盗むと評判がないといふ時ハ頭を剃ずあかし坊主になる又認めことのでござるされバ当時の人ハこの悪事をまきおき下心を以て転ぬ先の前杖にかく散髪になるとおもふ何に思ふ合点のゆかぬ了簡でござるその僻らしく高慢らしく散髪にきればもう直に物識りのふりをして文明だらうか開化だらうか開けぬらうかトンと白痴が新田

開發なさる事より前たとへば込み入て居り升されど是等ハ
皆余斗なる仕事にかゝる了簡もなく無益に西洋
人の真似をなさる人等が多くなれバ自然人情が浮薄
になり徳實なる心ハ失て終ハ真實西洋人に随從ふや
うになり行ませうされバ矢張是迄通り髪を結ひ袖の
ある衣服を着用なし西洋風の家作を禁じ四足
ハ食ぬやう御布令のあつて方がよいかと思ひ升

開次郎
成程足下の理窟ハ一應ハ御尤の事に聞ゆれどもまづ

正真乃理合ハ更ニ知人なさらぬゆゑにてござる先食物と
ト申者ハ畢竟身躰乃滋養ニ食ふるけにてなんでも
身躰乃為ニなる物を食はねバ夫ハならぬゆゑにてござる
夫を日本の食物と云者ハ只口ニうまきを専一として
養生抔のことハ聊もかまいませぬされバ日本人ハ根氣
弱く西洋人乃やうニ蒸氣船や傳信機抔乃大發明を
なる事ハ出来ませんさて第一身躰乃滋養ニなる
宜き食物ハ牛肉牛乳豕肉鳥肉の類なるく是ハ西洋
人が化學と申ス物乃原質を取調べる學問にて悉

く調へ聊疑のないことでござる又昔しハ獣乃肉を食ハぬといふハよく古しへを知らぬ人乃言葉でござる既に古語拾遺といふ書籍に大國主神乃營田乃日に宍を以て田を作る人に食ハしめ給へることがござる又人乃世となりてハ仁徳天皇様ハ兎餓野乃鹿の声を聞てその肉を召上るに忍びたまはれ孝徳天皇様ハ牛の乳を飲えたまひて之を献ぜしものに和薬使主といふ氏姓をたまはりし抔いふよし獣肉や牛乳を用ゐ給ひし證據なく皆悉く書物に書載てござる特に今でも信

州諏訪の祭にハ百疋の鹿の頭を備へるよしなれバさるま
れ神代の遺風ならんといふものへよりて獣肉を忌まぬものもし
でおざるされバこそ穢などいふ事ハ佛法が傳りて以来坊主
等のいひ出せしものなれバ取に足らぬことでおざる又當
節家作をするに強て西洋の風を真似るといふわけハ
おざらぬ人もあれども今迄の家作ハ第一火事の患があ
るし第二に養生の法に適ぬゆゑ身躰の為を思ふ
人ハ追々西洋風に立かへるものもあり又考へて御覧な
され是迄の土蔵を作りても西洋風に普請をするも

いづれが安直に出来升か考れバなるほど無益に金銭を費すといふ理ハなかなかあり升まひそれにまだ一つ大きな事がござるもし流行病といふものハ水溜りや腐敗物の太陽にてむされたる悪氣を人が嗅込でなるから發るのでござる又空氣といふ物ハ大切なるものにて空氣がなかりせバ人間ハ生活て居ることが出来ませんされバ家作ハつとめて空氣の流通するやうに水溜りや腐敗物を清潔に掃除の出来るやうにこしらへるが肝要でござるされバ是迄の家作の仕方にとくハ上下

むちやくちやなる床ハ低し風ハ入らぬ様の下にハ水
が湛へて居る腐れ物ハ家の周圍に棄てあるナント
是でハ年中藥ある病人の絶えぬハあたりまへかおしらぬ
ハおざなりか窄袖や細袴を著用するともあるとを聞かまし
いはれるがなさけもきこえぬなしとておぎする先日本乃大古
ト乃風俗ハこれら窄袖なりし頭も惣髮の撫下げなるだ
ざるなれバ古き画抔にも見えたる書物にも證據が澤
山あるなれバ中古よりて漢土の風が移り袖も長く
し髮を結ふよしなしとておぎする半髮野郎頭となり

ものハ乱世乃陋しき風なりやく三四百年以来乃
なりてなかざるさうく人といふものハ便利を専一にせねバ
ならぬものなく譬へバ物を運ぶに荷ふよりも車乃方
が便利よきゆゑ自然車を用ゐるやうに成行ことゝなく
萬事にな同じ事でなかざるさまゆゑ長い袖のぶしよ
なものにして邪魔になるよりも誰も便利よき窄袖を
着用することゝなく其を不便でも長い袖の衣服を
着るといふことをすならバ世乃中の仕事皆便利を舎て
不便利なるにしへ立戻らねバならぬまひ去るさバ百

姓ハ便利な鋤鍬を舎て手を以て田を堀り職人ハ便利な鉋鋸を舎て手を以て家を作るナントそんな馬鹿なことを誰も承知するものハござり升まいさういふ事から散髪の話に移りませう先散髪に於て申さバ養生と便利倹約の三徳がござる第一養生とハ人間の頭脳ハ精神の住居なれバ極大切なところでござるそれゆゑ天道様が造へるにごく大丈夫なる骨を組合せ其上に皮を覆ひ又髪の毛を覆ひ又其上に帽子を冠て是大切なる事を人にさとらせる自然の妙理で

ずきうるそりきを身代を剃るがし日ゆてりきま）雨露霜に
うたせしハ一寸考へても天道様の意に悖て不養
生のなしそていずきらんか第二便利とハ一寸他へゆくに
も髪結の手を待ず我手にて撫付用が足り外
第三倹約とハ油元結の冗費を省き殊に夏向ハ鬢
付油の蒸發臭き匂ひもなく誠に愉快なものでござ
ざるナント是等にても散髪の利益ハわかりましたらう
うさて段々の話か通り肉類ハ養生の為に食ら
ふゝけ殊に昔しよりも天子様をはじめ召上らせしと

西洋風乃家作窄袖散髪などもさることなれ便利養生乃為にならざる且窄袖散髪ハ日本乃古風なれバ強西洋を真似るといふわけもあるまじされバ足下乃説論ハその本を正さぬ誤にて一つも理に合ぬことゞもなる従し少からぬ世乃半生熟先生ハ此等のわけも知らず只旨趣に開化めかす人もありて真の物識乃眼にハ片腹痛きことのみ多いてならぬ事ども自然と此等の規則にかなへハまこと当人の為にハいか程か利益あることなれど他乃偏屈に凝結て居る人よりも幾等乃徳を

得るかしれません唯ねがハくハ此等の人半生熟なる浮薄心をやめ真実にその利益を受るやういたしたうござる

(八)舊平

足下乃話ハこまかく法も至極よく呑込ました僕も今迄ハそんな道理ハ分らずて唯昔し堅氣乃偏屈なら此頃乃事とハなんでも皆異風なでござるやうに思ひて居たが今乃法理解で始て夢がさめましたさうなのうまで一口ども僕の胸に落ない事がござるそれゆゑ

なくだといふに蒸氣車や傳信機の事でござる世間の噂をきくに鐵道を造るにハ人を生埋にするとあれバ出来ぬ傳信機ハ女の生血を銅線へぬるゆゑ遠方へ音信が通じる是皆切支丹の仕法なりと西洋人が此等の事を日本人に見せ膽をつぶさせその虚に乗じ日本を奪ふといふ不届至極なる計略だとや觸し升すに去年の春西國邊の百姓一揆ハ此等の事から起たと申升僕もそんな馬鹿なこともあるまいと思へども銅線なとを百里も二百里も先へ便りが出来二十里三十里

乃道を徒歩ハ一時か半時ハ往復なるを見れハ誠ハふしぎなる成程切支丹乃仕法かと思ひ升殊ハある物識の法話ハ鉄道だの傳信機ハ西洋人乃國のやうなる野山が幾萬里とつゞく果なき大國ハハ重宝なれど日本乃如き小國ハハ無用な物ぞその訳ハ日本のぐるりハ盡く海ゆゑ急な用事ハ蒸氣船ならく足りその外ハ日本船なら澤山なり文通ハ飛脚や人ハ托めバ果から果まで二十日か三十日ならく届くなれバ是まででさへかく沢山便なるりく居りしところ今急ハ長崎横濱箱館の

便が一日の中に知れるとく其れ同じく頼む無き用事
もはや落入るところ無益な物でござるぞ無益のこと
でいなく商人などには大不為なく是までハ諸國の
相場が急にしれざるゆゑ大坂の米を東京へ積送れ
ば利があり松前の鰊を上方へ送れば儲がありして
けっしてござるそれを鉄道や傳信機が出来てはその土
地の人々が急に諸方の相場を知るゆゑ他の商人が買
出しに行ても安直には賣られ自然商賣が衰微する
種だと法語をもつくがされハ請求なりけでござる故

人にいたせ鉄道や傳信機といふ物ハ切支丹乃魔
法にて此事を以て日本人乃膽を挫ぎつひに日本を
甘くせしめもしくハ西洋人乃悪巧でござる事にある
方乃御話の通り日本にとつてハ無益な物なるを政府でハ
更に御存じなくゆく〳〵ハ日本國中鉄道傳信機乃
充満するやうになさるとの事と誠に痴獣とも白痴とも
ト申すのなきにと申すも此の樵平抔ハ悔しく存じ入
蟲を鏖碎やうに覚え升
開次郎

舊平君失禮ながら足下の御話ハ皆深き理合を知ん
なさらぬことでござる先蒸氣車といふものハ蒸氣乃
力で走る車なり一合乃水を沸騰せ全く水がなくな
れバ一石七斗の蒸氣となる即千七百倍乃容でござる
からハ非常ニ膨脹たる蒸氣を捕へ「シリンドル」といふ鐵の
乃筒乃中ニ入レその發力を籍りて車を運轉させ
る仕掛でござる此の器械を仕掛し車を機關車と
名付一ツ乃機關車ニて他の車二十輌乃至四十輌を
引出してござる又車乃製造ハ皆大丈夫なる鐵乃

輪四ッ宛をつけたる造り方ゆゑ尋常の道を走ること
が出来ません夫ゆゑ別に道を平にし車輪の當る
ところに巾二寸厚サ四寸許の鉄を二條填め常に其
の上を往来するやうにしたものがいはゆる鉄道でござる
又傳信機とは「エレキトル」の氣力によりて音信を通
ずる仕掛でござる其のエレキトルといふ象は天地間の
萬物に備はりある一ッの氣にして磁石が鉄を吸ふ
は此力のあるゆゑにしてござるさうして傳信機の仕掛
はエレキトルマグ子ットといふ鍛鉄の棒とガルバニッ

クバッテリー」といふ銅と白鉛を入れたる箱をもつて
エレキトルの氣力をおこしこれを彼是の間にかけ
まうけしたる銅線のもじに通ずれハ道の遠近にかゝ
はらず直に先方に通ずるゆゑにて此方にて銅線の
もじをイの字の所へ當れバ先方にても同じくイの字
をつき口の字へ當れバ口の字をつく實にその働自由
自在にして恰も對面して話をするやうにていさゝかさうゐなし此
等の事ハ前にいへる窮理學といふ學問を學びなバ
忽ちわかることにして「ナニ」かゝる道理を知人なきゆゑに銭

道や傳信機ハ切支丹でもなくふしぎでもござらね共ま
ひ又鉄道ハ日本のやうにめぐり海にて船の便利がよ
き國柄でハ無益だの音信ハ是迄の飛脚にて十分
足りる傳信機ハ余計さ抔いふ事ハそんな偏屈な理をし
らぬ人の言葉でござる第一西洋でも英國抔といふ國
ハ日本よりも少し小き位なる矢張島國でござる
に國中惣躰鉄道の長サを積れバ殆んど四千里に及
び傳信機ハ何所も蜘蛛の網を張る如く引架して
あるしのさときゝバ船の便利よき國柄にても鉄道

傳信機ハ必用な物と思ハれ升譬へハ東京と横濱の間を川蒸氣ふして往来すれバ稍く一日ふ両度位なれバとても叶ませんでしたが鉄道が出来てよりハ一日ふ十度ハ往復が出来升ナント便利でハござりせんか又音信も是迄ハ稍く一日一度のところが傳信機ふてハ烟草一服吸ぬうちに返事が来るから實ふ便利といふても舌を巻ぐらゐでハござい升それゆゑ商賣の繁昌ハいふに及バず大事病氣ふても忽ち間ふあふといふも是皆鉄道傳信機の徳蔭でござる又山國でハ是迄運送の不便なるより出来

無き産物も捨置て骨を折らぬ場所がござる其道
が鉄道伝信機が出来運送が自由になれバ我勝に
骨を折り産物を積出す工夫をなす故自然産物
も殖え民百姓も饒富になる理にて且馬の脊を以
て運送するよりも鉄道の方がはるか安賃銭なれバ
おのづから産物の直段も下落をいたしてござる ナント
此等を考へたら鉄道傳信機ハ國を富し民を饒
富にするにハ必用な物でハござらぬかさりとて鉄道伝信
機が出来れバ商人の儲がなくなり商賣が衰微ま

るとハ沙汰のかぎり誠にあきれて口が閉げません何故なら大なる物の相場といふ物ハ時の景気によりて高下する物にて中々人力を以て自由になるわけにハゆかぬものでござる譬へバ豊年にハ誰しも米の直段ハ追々下落するならんと考へるより米を持る人ハ我勝に売らん事を競ふ是に於て米相場ハ益々下落いたし升が凶年にハ其反にかハり追々米が払底になるゆゑと思ふ由ある人ハ蔵へ積込おきて高直を待て売出さんと致まする故益々高直になるされバ何れの土地に

てな品物が澤山にて賣人が多ければ直段の下落ハ
必定のことにてあざる也鉄道傳信機が出来れバ是迄
とかく日々諸方の相場が知れる也買人の集り
方も自然とかハる也相場高低の間の日数も
是迄のやうに永くハかゝり升まじけれども商人が平
常心に油断なく諸方に気を配りよく勉強さへすれ
バ萬事便利のよきことなれバ昔しよりも儲ハ却而多く
あるべき筈なり且商人といふものハ千両のもと商ひ
を一度にして百両の利を得るよりも千両の商ひ十度

しく百両の利を得る方が品物の賣方もよく金銀の融通もよき理にて如何程當人の為になるかしれませんそれをいまゝでの商人は一年に一度か二度の商賣をなし一際に濡手で粟を攫むやうなる儲をせしめやうといふ懶惰者のみ多かりし事だがいまからはそんな手ぬるきことでは間に合ぬゆゑおのづと商賣に勵む心になり一年に百度も二百度も商賣をするやうになりませうさすれば品物の賣方もよく又金銀の融通もよくなる理合にて獨り商人の幸ひでは

ちよく天下一般の幸福てハありませんかさてその源を
考へ見れハ鉄道傳信機の御蔭でござる

舊平

段々の御理解誠ニ感心いたしました實ニ足下の御話
の通り當時政府の御政事と申ものハ皆民百姓我々
の安穏ニ暮すべき金銭が沢山儲つて沢山歓楽の出
来るやうにとの御趣意だといふ事ハ了然と分り恰
も夢の覚たやうに思ハれ升今迄ハ古人の道理の有
る事とハ露ほども知らず只當時の事ハ皆異風な悪い

きたしそうのて思ひ政府の法政道を彼是いろ〳〵や上足
下に對していろ〳〵な僻論を唱へましたけれど今更なんと
も恐入面目なき次第でござる

開化郎

僕の愚論が法胸に落ましたかそれでこそ僕も法詰
まだ甲斐があつてよろこばしうござる今の世の中の風
俗といふものは唯なんの譯もわからずに青贅に昔しの事
を悪くいひ當時の流行を真似る人抔が多いのに足
下は心底天子様の為を思ふところから新規の物事

をするいものと思ハれし彼是談論もいひ聞かせし事
てござるそれが僕の話が御胸に落入りリラリと以前
の談論を棄てしまひなさッた所ハ真に日本人乃気象
なく貴い御心感心いたしましたそれて段々御話しを承
ハれどかく銘々皆政府乃御趣意を守り勉強さへすれ
是バいか程面白楽しくも出来いかな程貴き身になれ
おそるゝ事なくナンと舊平君よくよく考へて御覧ニハ
涙乃流るゝほど有難き御時節てハござらぬか

開化問答巻下終

明治七年三月新刻

日本橋通三丁目
丸屋善七

東京書肆
須田町
冨城屋藤兵衛

同
和泉屋勘右衛門